

早稲田大学 政治経済学部 世界史 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	60分
特徴・その他	昨年に比べ難化し例年の水準に戻った。ヨーロッパ史に偏った出題となった。

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
I	東アジア・東南アジア沿海部の都市(地図問題)	地図で上海・寧波を確認し関連する文を特定するところが難しい。東南アジアの正誤判定のポイントも非常に細かいものがある。	難
II	19世紀の東南アジアとイギリス	A-1では南京条約はアヘン貿易に触れていない点が重要。アヘン貿易公認は北京条約である。「アヘン戦争の仕掛け人」という表現は聞きなれないと思うが、ジャーディン=マセソン商会が正解。この会社は今も香港に本社を置いて活動中。	標準
III	古代・中世のヨーロッパ	ヘロドトスの生地(ミレトスは誤りでハリカルナッソスが正しい)など正誤判定の基準はかなり細かいものもあれば、その一方で基本なものもある。空欄補充はやさしい。	一部難
IV	文化史を中心とした大航海時代・絶対主義時代ヨーロッパ	A-1のカール5世は16世紀、ベラスケスは17世紀の人物。それほど有名でない文化史の人物と政治家のかかわりは、なさそうでもありありそうでもあり、判定はなかなか難しい。活躍した時代を大きく世紀でおさえておくと楽になる。A-6のフランドル地方の産業の2つ目「亜麻織物業」は高校レベルを完全に逸脱。消去法でも対処は困難。	一部難
V	ヨーロッパの「長い19世紀」	B-bのクリミア戦争はオスマン帝国と露の戦争に英仏が参戦した。規模・被害ともに第一次世界大戦が始まるまで、欧州最大の国際戦争とみなされていた。	標準
VI	19・20世紀の欧米(写真使用)	ピカソの「ゲルニカ」は受験界の定番絵画。ミュンヘン会談の写真は、ヒトラー・ムッソリーニの顔を知らない場合は(早大合格者にはいないと思うが)対応が困難。大物政治家の顔は積極的に覚えておくべきか。ヨーロッパ統合関連の年代配列は	標準

		一見すると難しそうだが、よくみると配列は2パターンの択一問題である。	
--	--	------------------------------------	--

〔総合コメント〕

昨年に比べ難しくなった、というより点をとりにくくなった。正誤判定の文章にはくせのありそうなものが目立ち、よほど確実な知識がないと最後まで迷ってしまうだろう。こうなると、ある程度は問題慣れからくる一種の勘に頼らざるを得ない。この水準の入試問題を大量にこなして来た受験生は、自信はなくても結局は得点できたのではないか。正誤問題のややこしさに比べると、記述式は素直な問題が多い。こちらで失点を出さないことも大切だ。早大政経は過去にも難しい地図問題を多く出題している。今年の第I問のような地図とリンクした正誤判定で高得点をねらうためには、普段から地図と一体となった学習を心がけることが肝要である。